

【論文提出者】 社会文化科学教育部 文化学専攻 日本・東アジア文化学領域
氏名 井上 貴保子

【論文題目】 芥川龍之介研究 ―〈「話」らしい話のない小説〉を中心として―

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、出発期以降の多彩な作風で日本近代文学に重要な足跡を残した作家の芥川龍之介（1892-1927）を考察の対象として、芥川が晩年の1927年に作家谷崎潤一郎との論争の中で提唱した〈「話」らしい話のない小説〉という著名な小説観を検討し、この理念が先行の芥川文学から断絶する形で登場したのではなく、初期以来の創作活動の延長上で形成されたことを、系統的な作品分析に基づき考察した論考である。

本論文全体は、序章、全五章からなる本論部分（補論一を含む）、終章から構成される。序章では、〈「話」らしい話のない小説〉という芥川の小説観の考察に際して、先行研究の問題の検討を踏まえて、芥川の実際の作品に即した理解とその初期作品以降の通時的な展開の分析という本論の基本的方向性を提示する。この方針に基づいて、第一章では、芥川と谷崎の論争の経緯を含む〈「話」らしい話のない小説〉論に関する基本的事実を整理した上で、この小説観の理念が反映された「実作」として「海のほとり」「年末の一日」「蜃気楼」などの私小説的作品と「誘惑」「浅草公園」などの断章形式の作品の二傾向が同時代以降に認知されたことを確認する。続く第二章では、芥川作品における語りと小説形式の変遷について概観し、芥川の初期以降の各時期の作品に見られる語りと形式の特徴を一人称的三人称、三人称的一人称、入れ籠構造といった観点から分析した上で、一連の特徴が後年の私小説的作品や断章形式の作品へと発展するという芥川文学に対する通時的な展望を提示する。第三章では、〈「話」らしい話のない小説〉の「実作」の傾向の一つである私小説的作品について、作者自身を想起させる語り手の登場する作品を〈芥川〉作品として広く措定し、それら〈芥川〉作品の初期以降の変遷について、文末表現を含めた文体の分析を通して各時期の語りの展開を考察する。続く第四章では、〈「話」らしい話のない小説〉の「実作」のもう一つの傾向である断章形式の作品に関して、芥川の章形式を持つ小説と断章形式の随筆・小品を対象に通時的展開を分析する。そして第五章では、前章までの分析をふまえて、芥川晩年の〈「話」らしい話のない小説〉という小説論の「実作」における試行について総合的に検討する。一連の検討を通して芥川晩年の「蜃気楼」に代表される私小説的作品や「誘惑」「浅草公園」のような断章的作品には、作品の持つ断片性や断章性に対して連続性を与える創作上の工夫が存在すると分析し、そのような断章性と連続性の両立を達成した作品として遺作「歯車」を位置付ける。結章は、本論の論旨を再確認するとともに今後の課題を記述する。

本論文の示す新知見と独創性は、以下の三点に要約される。第一に、現在も芥川研究で諸説が存在する〈「話」らしい話のない小説〉という小説観が、芥川の初期作品からの展開の延長上にあることを、私小説的作品と断章形式の作品の通時的分析を通して実証的に示し、芥川文学理解の新たな展望を示したこと。その展望は、同小説論における同時代文化の影響や所謂「詩的精神」の理解という課題を残すが、十分な説得力を持つ。第二に、芥川文学の小説形式の変遷について、語りと形式の観点から各時期の特性を巨視的に展望し、各時期の作風の相互関係を提示したこと。各時期の個別作品の考察は、小品「槍ヶ岳紀行」を含めた先行論が乏しい作品も対象としており、芥川の個別作品論に対する新たな示唆を含む。第三に、芥川晩年の作品に関する集中的な分析を通して、同時期の芥川文学の総体的理解の可能性を示したこと。一連の本論文の示す知見は、従来から豊富な蓄積を持つ芥川文学研

究に対する貢献として評価できる。

以上の通り、本論文は、作家芥川が晩年に提唱した小説観と実際の創作との関係の分析を通して日本近代文学の研究に新たな知見と展望をもたらすものであり、博士（文学）の学位にふさわしいと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

学位論文申請者は、令和2年1月20日（月）に実施した最終試験（口頭試問）において、博士学位論文の内容に対する審査委員の質疑に対して、適切な応答を行った。

また令和2年1月25日（土）に開催された学位論文公開発表会において、博士学位論文の主旨についての的確な発表を行い、これに対する質疑に対しても適切に応答した。

これらにより、当該研究テーマについての博士の学位にふさわしい学力及び関連領域に関して十分な知識を備えていることが確認された。学位論文審査の結果とあわせて、申請者に博士（文学）の学位を授与することができると判断する。

【審査委員会】

主査	坂元	昌樹
委員	茂木	俊伸
委員	西槇	偉
委員	屋敷	信晴
委員	五島	慶一